

ビールやワインの適量摂取が腹部大動脈瘤の発症予防に有効な可能性あり

アルコール摂取と腹部大動脈瘤の発症との関連性についての報告は少ない。そこで本研究では、スウェーデンの集団におけるアルコール摂取と腹部大動脈瘤の関連について検討した。

1998年の登録時に46~84歳であった男性44,715人、女性35,569人を対象とし追跡した。アルコール摂取については食品摂取頻度調査票を用いて調査した。2011年までの14年間の追跡期間中で、男性1,020人、女性194人に腹部大動脈瘤の発症が確認された。解析の結果、アルコール摂取が週にグラス1杯（エタノール12gに相当）の男性と比べて、週にグラス10杯の男性の腹部大動脈瘤発症のハザード比は0.80と有意に低かった。同様に、女性では週にグラス5杯のアルコール摂取によるハザード比は0.57であった。心臓血管病のない被験者ではアルコール摂取量と腹部大動脈瘤との負の相関関係は弱かった。男性ではビール、女性ではワインが最も飲まれており、両者とも腹部大動脈瘤発症との間に負の相関関係が見られたが、蒸留酒に関してはそうした関係はみられなかった。

したがって、ビールまたはワインの適量摂取が腹部大動脈瘤の発症予防に有効である可能性が示唆された。ただし、アルコールの大量摂取との関係については不明なままである。

出典：Circulation. 2014; 130: 646-652